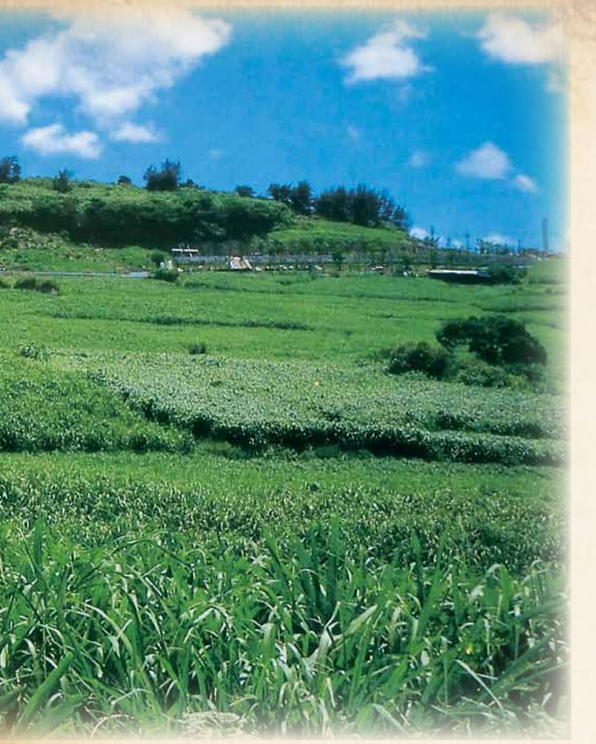
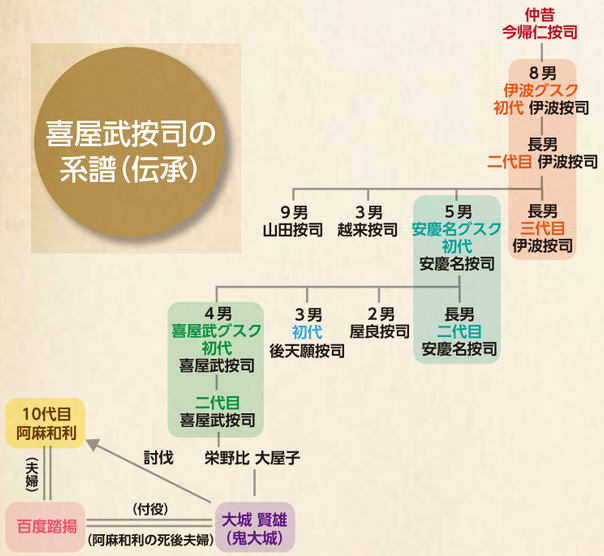


喜屋武按司の系譜（伝承）



場所へ移動し、メンタ門中、ガージャ門中を中心に形成された集落と考えられます。

近世時代の具志川間切は早くから首里士族の居住地となったようです。具志頭親方蔡温の『御教条』(1732年)は士族の人口が増え、就職難に苦しむ士族を都市部から地方へ移るよう勧めていることがわかります。また、その背景は同時代に平敷屋朝敏が『貧家記』を残した物語からもうかがえます。

『具志川市誌』によると、1925年の仲嶺村40戸はその村内に赤間佐19戸、苦増原16戸、西塩屋68戸、當銘近所58戸となり、喜屋武村は76戸に対し、上平良川69戸までになりました。1950年は喜屋武村から上平良川が分離し、1951年に仲嶺村から喜久山近所、當銘近所が独立し、豊原となりました。その結果、喜屋武村は76戸、仲嶺村は40戸の規模となり、1956年にお互い合併して喜仲116戸へ変わりました。現在は住宅地の区画整備（二丁目）が進められ、具志川高校の誘致等により市街地と発展しました。

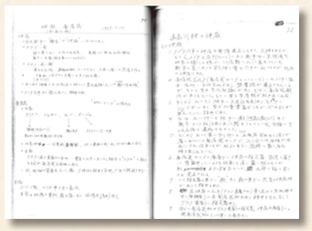
喜仲の概要

喜仲は喜屋武と仲嶺の集落が1956（昭和31）年に統合され、ひとつの字名となりました。その位置は沖縄本島中部の東海岸、天願川支流のシカンガーラ上流域にあります。喜仲より東側の勝連半島（金武湾）、その逆の西側の中城村から知念半島へ連なる分水嶺と中城湾の地形は絶景です。また、喜屋武マーブ公園の高台より赤道集落から天願集落にかけて見渡すと、沖縄県内屈指のカルスト残丘も眺めることができます。

■面積0.50㎢　■人口2,927人　■世帯数1,133世帯
※人口、世帯数は2014年9月現在（うるま市）。

アタビチャー石

『具志川市史 第3巻 民話編上・伝説』（1997年）には「喜屋武の部落は髙江洲中学校の上の方にあったそうだが、津波が寄せてきたとき、喜屋武マーブの石が壊れて、ちょうどアタビチャー（蛙）が跳ぶようにして、石が落ちてきたので、アタビチャー石と呼ぶようになった。アタビチャー石は豊原と仲嶺の間の急な坂にあった。」と、喜仲の石川浩さん（大正3年生まれ）の語りが収められています。

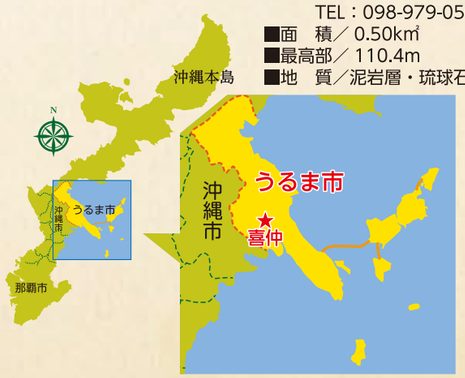


喜仲を歩いた学者

沖縄の考古学の父・多和田真淳（琉球政府文化財保護委員会）は1932（昭和7）年に「喜屋武マーブ遺跡」を発見しました。その後、沖縄の地理学の父・仲松彌秀（琉球大学教授）は1968年に喜屋武と仲嶺の両集落を歩き、当時の古老より聞き書きしたノートや著書『神と村』（1968年）を残しました。また、道教研究の重鎮・窪徳忠（東京大学名誉教授）は喜屋武の土帝君を調査し、『沖縄の習俗と信仰』（1971年）等を著しました。

INFORMATION

喜仲 喜仲公民館連絡先
沖縄県うるま市喜仲 3-6-5
TEL：098-979-0503
■面　積／ 0.50㎢
■最高部／ 110.4m
■地　質／泥岩層・琉球石灰岩



沖縄県うるま市教育委員会
〒904-2226　沖縄県うるま市字仲嶺175
TEL（098）973-4400

うるま市 文化財シリーズ 14

喜仲

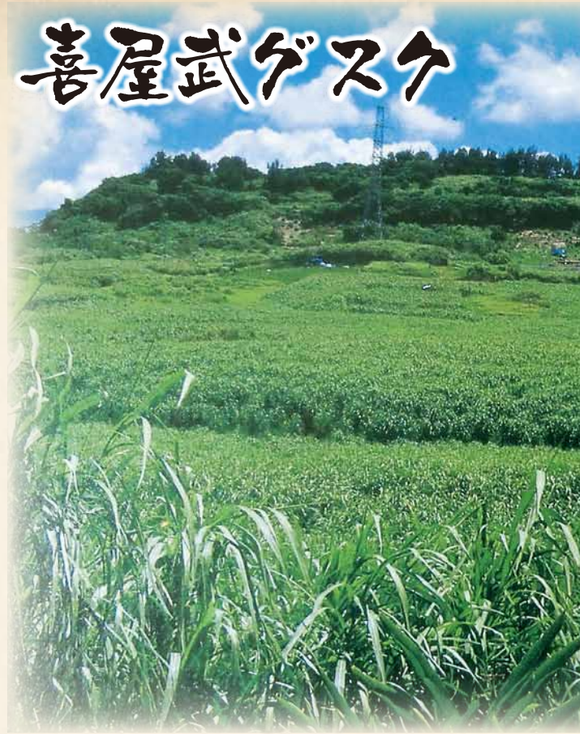
KINAKA

琉球王府が編さんした
『おもろさうし』巻十四（1623年）に
「きやむもり」とあります。
また、17世紀の『琉球国高究帳』にも
「喜屋武村」が確認できます。

「中嶺村」「喜屋武村」の村名は
『琉球国由来記』（1713年）に記されています。
また、『絵図郷村帳』（1737年）では
現在の仲嶺にあたる「たうばる村」もあります。

沖縄県うるま市教育委員会

喜仲公民館前にある石碑



喜屋武グスク

別　名　喜屋武マーブ、仲嶺マーブ、火打ち嶺
時　代　沖縄貝塚時代後期終末期～グスク時代
出土物　くびれ平底土器、グスク土器（鍋形・壺形）、中国製青磁等
現　在　喜屋武マーブ公園を含む
解　説　『琉球国由来記』（1713年）の仲嶺村は「マアブノ嶽 神名 イシヅカサノ御イベ」と記録され、喜屋武村は「タケナフ嶽 神名 コバヅカサノ御イベ」とあります。それらの御嶽は上江洲ノロが拝むことになっています。また、城またはグスクと記述されていないことからも御嶽と集落の関係が密接であり、その後、御嶽がグスクへ発達したと考えられます。地元では「チャンマーブ」等と呼ばれていることからも推測できます。そのマーブには安慶名按司の四男が初代喜屋武按司となり、子孫3代の拠点となったと伝承がありますが未詳です。勝連城の按司・阿麻和利を討伐した大城賢雄（鬼大城）が幼年期に暮らしていたと伝えられています。1644年琉球王府の遠見番制度により、烽火台が設置され、「火打ち嶺」とも呼ばれていました。マーブ内の石垣は大正末期から昭和初期にかけて集落内の主要道路、県道川田・赤道線の道路、下原の護岸工事等に利用され取り壊されたと言われています。

喜仲の成り立ち

喜屋武マーブは1998～1999年の発掘調査によって約1,000年前（沖縄貝塚時代後期終末期～グスク時代）の遺跡だとわかりました。

『具志川市誌』（1970年）には「はじめ喜屋武城南東の真下にあったが、のちに現在地に移動したという」とあります。また、その辺りには元島のウブガーと称す喜屋武と仲嶺の湧水もあり、カーウガミ（湧水での祈願）も続いていることから移動した痕跡がわかります。

『おもろさうし』巻十四（1623年）には喜屋武を示す「きやむもり」があり、また同巻十六に喜屋武の小字名とみられる「たいら」もあります。そして、『琉球国高究帳』（1635～1646年）には「喜屋武村」、『琉球国由来記』（1713年）に「中嶺村」と「喜屋武村」、『絵図郷村帳』（1737年）に仲嶺にあたる「たうばる村」の村名がみえます。

村と御嶽やグスクとの関係を調べた地理学の仲松彌秀は、1968年に仲嶺村のメンタ門中と喜屋武村のガージャ門中の神女より聞き取りし、村内にある湧水や殿なども確認して集落の発達を探りました。おそらく、喜仲は喜屋武マーブやその東南に位置する元島より現在の

喜屋武（きゃん）（方言：チャン）

⑫喜屋武の神屋

石川氏宅の屋敷内に神アシャギがあり、喜屋武の村神と火ヌ神が祀られています。旧正月ハチウクシーをはじめ、村の諸行事には最初に拝みます。年４回のウマチーでは喜屋武の喜有会がビンシーと重箱をお供えします。また、村外から移住してきた人や子どもが産まれた家などはその神屋を拝みます。

⑭土帝君（トゥーティークー）

中国が起源の土地神で、五穀豊穣、村の繁栄、健康、子孫繁栄を祈ります。御神体はフトキ像や絵、石などがあります。喜屋武の土帝君は石を御神体としています。以前は殿（トゥン）敷地東側入口近くにありましたが、1990（平成2）年「日の出公園」新設により現在の地に移転しました。

旧正月ハチウクシー、八月十五夜、九月九日菊酒、カーウガミ等には喜屋武の喜有会が中心となって拝んでいます。

⑦喜屋武の産泉（ウブガー）

産湯を汲む井泉です。正月には若水を汲み、身を清め、お茶を入れ一年の幸を祈願します。また、結婚の際は新婦がウブガーの水を婚家の仏壇に供える等、人生の節目や日常生活用水としても使われていました。

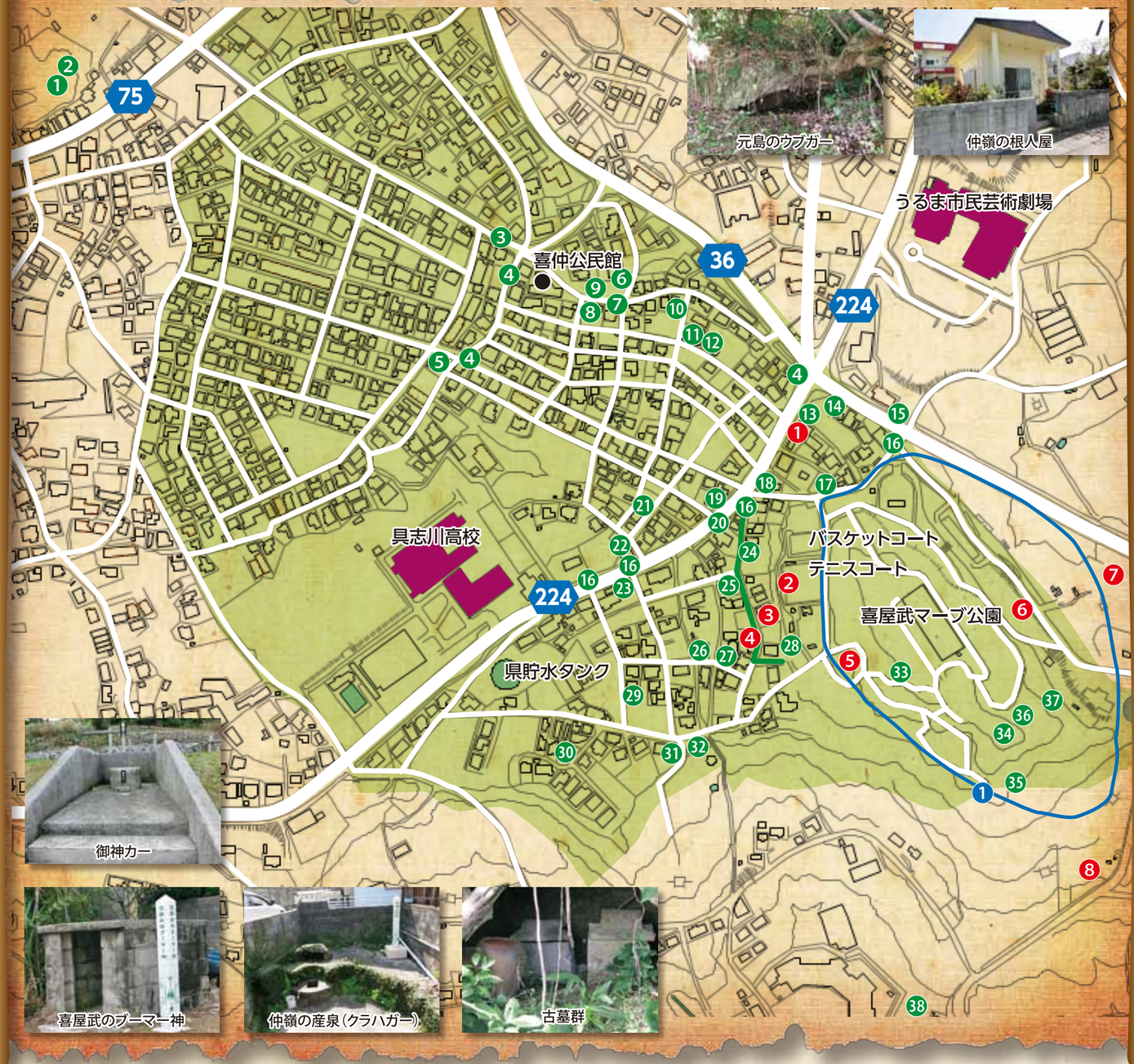
現在、その付近に人家はありませんが、1944（昭和19）年の古い地図には7軒の屋敷と、2軒のサーターヤー跡が記載されています。現在も喜有会、仲嶺がカーウガミの際に参拝します。

⑬喜屋武の殿（トゥン、ウガン）

『琉球国由来記』に「タケナフ嶽ノ殿」「神名 コバズカサノ御イベ」とあります。その辺りは終戦直後まで松の大木、クバ、アダンも生い茂り、聖域の情景を残す場所で、特定の人しか入れませんでした。かつてはウマチーの際に新米で作ったウケーメーを供え豊年を祈願しました。現在は旧暦の正月ハチウクシー、八月十五夜、九月九日菊酒、カーウガミ等に喜有会が中心に拝んでいます。1990（平成2）年に「日の出公園」へ整備されました。

①喜屋武の村ガー

殿（トゥン）で行われる祭祀の際、ノロやクディが白装束を着け、髪を洗い、みそぎをしました。後世は、ミジナディというまじないで額にカーの水をつけるだけになります。旧正月ハチウクシー、八月十五夜、九月九日菊酒、カーウガミ等は、喜有会が中心に拝んでいます。



民俗文化財・その他

1. 喜屋武按司の墓（シカンムイ）
2. ウミナイビの墓（シカンムイ）
3. ガンヤー跡
4. 喜屋武のシマクサラシの場所
5. イリーモウーグヮー
6. 慰霊塔（喜屋武）
7. 喜屋武のシマミシーの場所
8. サーターヤー跡（ニシグミ、ナカグミ、アガリ）
9. 喜屋武のモーアシビードゥクル
10. 喜屋武のブーマー神
11. 喜屋武の根屋（タキノウ）
12. 喜屋武の神屋
13. 喜屋武の殿（トゥン・ウガン）
14. 土帝君（トゥーティークー）
15. ウシナー（闘牛場）跡
16. 仲嶺のシマクサラシの場所
17. 仲嶺のシマミシーの場所
18. アガリグムイ跡
19. メーシジ（アシビナー）跡
20. つなひき場
21. イリーグムイ跡
22. カンジャーモー（仲嶺のモーアシビー）跡
23. サーターヤー跡（上組、下組）
24. カミミチ（神道）
25. イリヤーグヮーヌメーグムイ跡
26. 仲嶺の村神（喜屋武按司神屋）
27. 仲嶺の根人屋（ニーチュヤー）
28. 慰霊塔（仲嶺）
29. イリヤーヌメーグムイ跡
30. イニフシモー（稲干し場）跡
31. 仲嶺のブーマー神
32. 仲嶺のアシビナー（マチューグヮー）
33. 仲嶺の殿と地頭火ヌ神
34. 喜屋武按司の墓
35. マーブの御嶽
36. ウセーカーワリ
37. 古墓群
38. アタビチャー石

井泉

1. 喜屋武の村ガー
2. 仲嶺の根人カー
3. 昭和のタマガー
4. 仲嶺の産泉（クラハガー）
5. シードゥガー
6. 御神カー
7. 喜屋武の産井（ウブガー）
8. 元島のウブガー（喜屋武・仲嶺）

遺跡

1. 喜屋武グスク（喜屋武マーブ）

仲嶺（なかみね）（方言：ナカンミ）

㉞喜屋武按司の墓

喜屋武グスク崖下にある喜屋武按司の二男・三男腹の墓です。1972（昭和47）年の墓の修復の際、釉薬仕上げの御殿（ウドゥン）型の立派な厨子甕が2基確認されました。そのうち1基は割れていましたが、いずれにも遺骨が入っていました。メンター門中をはじめ、高江洲区の吉里門中、天願区の仲村渠門中、大田区の平良門中等がアジウシミーに喜屋武グスクと志々神森（長男腹）の両方の按司墓を拝んでいます。

㉝仲嶺の殿（トゥン）と地頭火ヌ神

『琉球国由来記』には「マフノ嶽ノ殿」とあります。殿とは、祭祀の際、根神たちが集合する場所です。戦前から建物はなく、大きなミートゥ（夫婦）松があり、聖域でした。殿に隣接して火ヌ神が祀られています。旧正月三日のハチウクシーは仲嶺が主体となり拝みます。年4回のウマチーは、各門中のクディを中心に門中の親族たちが一緒に拝みます。

㉖仲嶺の村神（喜屋武按司神屋）

以前は、喜屋武按司門中の神屋と同じ建物内の別棟に祀られていましたが、喜屋武按司門中の神屋新築（2003年6月）の際、同じ建物内に合祀されました。そこは新しく仲嶺の住人になった際、引っ越しの報告、家庭円満、健康等を祈願します。ウマチーは、おかゆを作って、ゆで卵を半分に割ったものを供えます。村神は又吉家（屋号:イリヤーグヮー）が管理しています。

⑤シードゥーガー

王府時代の男子が、15歳になって結髪式の際に身を清める王府公認の井泉です。当時の具志川間切には、15の村がありましたが、「シードゥーガー」と呼ばれるカーは仲嶺と田場の2つの集落だけでした。建造年代は不明ですが、小規模ながら切り石積みで造られています。石積みの保存状態は良好ですが、水は湧いておらず枯渇状態となっています。

㉟マーブの御嶽

仲嶺の守護神です。『琉球国由来記』には「マアブノ嶽」とあります。この場所は元島、産泉等、地形的位置関係や歴史研究書等から推定して、御嶽と位置づけました。

近世ではここから、煙を焚いて旅に出る家族を見送ったことで〈火タチモー〉と呼んでおり、旅の安全を祈願するのも御嶽の機能の一つです。